

## 103 誌上発表

東京市における  
明治女医の臨床研修病院

三崎 裕子

埼玉県所沢市

1885(明治18)年に荻野吟子が初めて医籍登録された後、荻野吟子はもちろん、後に続いた生沢クノ、高橋瑞らは、満を持して開業医としての生活をスタートさせた。4番目の女医本多センも、自らが学んだ成医会の東京慈恵病院産婦人科で働く一方、自宅で開業した。このように初期の明治女医達は、医術開業試験に合格するとすぐに開業医となったのだが、その多くが十分な臨床の経験を積むこともなく開業医となったのである。

当時の史料を見ると、多くの女医が臨床研修を「実地研究」「実地見学」と称しているが、ごく初期に、それが可能であったのは順天堂医院のみであった。順天堂医院については、高橋瑞がまだ済生学舎の学生だった頃、女子学生の臨床実習を許可する病院がないため、伝手を頼って当時の院長であった佐藤進に懇願し、その熱意に動かされた佐藤院長が月謝を免除して許可したという逸話が残っている。その後、順天堂は女子医学生や女医の唯一の実地見学の場となった。しかし吉岡弥生がその自伝で語ったところによれば、順天堂での実地見学も、当時は遠くから眺めるだけだったという。もちろん女医の帝国大学での研修は明治20年代には許可されず、1897(明治30)年によりやく見学生が認められ、正規に女医が研究室に所属したのは1905(明治38)年の事だった。初期の女医の中には、研修のために東京市養育院で無給の看護婦として働きながら学ぶ者もいた。

このような中、1892(明治25)年以降、東京市内の私立病院で女医が研修したという史料が散見されるようになる。明治20年代には山龍堂病院、桜井産科婦人科病院、小此木耳科医院、井上眼科病院、明治30年代になると告成堂病院(岩佐病院)、東京耳鼻咽喉科医院(金杉病院)、東京産科婦人科病院(浜田病院)、長田小児科病院などで女医が研修したという。さらに明治40年代に入ると東京顕微鏡院、東洋内科医院・南湖院、明治堂眼科医院の名も見られる。これらの病院は東大を退職した医師や、ドイツ留学から帰国した医師などが創設したもので、病院での診療のほか、医師免許証所持者や医術開業試験の後期記述試験に合格した学生を対象とした実地演習の講習会が開かれていた。講習会は病院によって異なるが、年に2、3回、1ヶ月から3ヶ月ほどの期間で、週2回程度講習が行なわれた。東修は3円から7円、月謝が1、2円だった。その内容は、例えば山龍堂病院で「毎講義の際聴者より順次員数を定めて毎回患者に付疾病を診断せしむ」とし、東京産科婦人科病院が「産科手術演習」とうたうように、まさに実践的な内容だったと思われる。

当時、開業医は帝国大学卒業、高等学校卒業、府県医学校卒業の医師、限地開業医、外国医学校卒業の医師に加え、医術開業試験合格の医師、従来開業医など、様々な学歴や立場の者が混在し、人数の多い医術開業試験合格医や従来開業医の中には、知識、技術の面での不安があるものも多く、それらを向上させる場が必要とされていた。先に挙げた病院の医師達は、そのような現状を憂い医療の知識、技術向上のための使命感から、開業医のレベルアップのための講座を開いたのである。このような私立病院の出現は、明治20年代半ば以降、留学を経て帝国大学で教鞭を取った医師やドイツ留学を経験した医師の数が、東京市内ではある程度増加していたという当時の医療事情を反映してのことであった。そして、それによって明治女医の実質的な臨床研修の場もたらされたのだった。済生学舎廃校後、東京女医学校、日本医学校などの創設により、女医の卒業後の研修もその付属病院で行なわれることが多くなったが、それらの学校の組織化が進むまでの間、順天堂医院に加えて上記の病院の果たした役割は、明治女医にとって極めて大きいものだったといえよう。